生命尊重の保育を考える

鮫島　良一

ただいまご紹介に預かりました。鶴見大学短期大学部附属三松幼稚園の園長を務めております。鮫島と申します。今、大学や歴史的なこと、中高の学生さんの話もありましたけれども、私のところは幼稚園ですので、小さい子たちがたくさん来ております。私からは「生命尊重の保育を考える」という題目で子どもたちの日々の様子をお話させて頂きたいと思います。

皆さん、幼い子どもの頃のことを覚えていらっしゃいますでしょうか。誰もがかつては幼い子どもであったはずですが、大人になりますと子どもの世界というのが遠くなってしまって、分かりにくくなってしまいます。今、特に少子化が問題になっておりますが、どうも合理的な世の中になってしまって、子どもの存在というのは不合理でなかなか思い通りにいかないものですから、一層何か「子どもという存在」が社会の中から不必要な、或いは面倒なもの、言い方はひどいですけれどもそういうふうに思われてしまっているのではないかと大変危惧しております。子どもは本当に人間そのもの、この世に生まれた一存在として非常に輝きを持ったピュアで瑞々しい存在です。シュルレアリスムの詩人アンドレ・ブルトンは、「真の人生は幼年期にある。小さい幼い子どもの姿こそが本当の人間の姿だ」と言っております。これからの短い時間ですけれども、幼い子どもたちに思いを馳せながら、人間について、生命につい

て、宗教について、皆さんと一緒に考えることが出来ればと思っております。

三松幼稚園について

三松幼稚園は鶴見大学短期大学部の附属の園であり、創立は昭和三十一年の四月です。現在は総持寺の大駐車場の脇の手枕坂というところを登った高台にありますけれど、かつては参道の門の脇の辺りにあったそうで、今年で創立六十七年を迎えます。地域の方々に大変愛され、よくして頂きながら、たくさんの子どもをこの地域の中で育て送り出してきております。保育は仏教保育をベースとした情操教育を基本とし、丁度この画像の右下の写真は一番大きい年長の五歳の子どもたちですけれど、月に一度の座禅をしているところです。普段は本山の参禅室からお坊様に来て頂き座禅の指導をしていただいておりますが、丁度この写真はコロナ渦でお寺と行き来が難しかった頃で、先ほど基調講演して頂いた本学の橋本先生にご指導いただき、子どもたちが一生懸命座っている姿です。また、短大には保育科がございますから、附属園には保育者養成校のモデル園という役割もあります。その中で、「一人ひとりの子どもの小さな発見や挑戦を大事にする保育」、すなわち一人ひとりの命が輝くような「生命尊重の保育」を目標にしております。

幼い子どもたちの姿から、仏教保育について少し考えてみたいのですけれど、はじめに「人間と他の動物は違う」ということからお話ししたいと思います。保育学の中では、人間と他の動物ではそもそものスタートから違うということが指摘されておりますので、その話を少しさせて頂いて、それから次に実際の幼稚園の様子を紹介します。幼稚園は学校教育の中に位置付けられていますが、その教育の方法においては小学校以降の教育とは大きく異なります。学校が「教科の教育」をするところであるのに対し、幼稚園の教育は「環境による教育」というのがその特徴ですので、その意味について説明します。そして実際の子どもの小さなエピソードを例に、「こういうことが日々の園生活の

中で起きている」ということをお伝えし、「子どもの営みと仏教保育につい」て少しまとめのようなことを述べさせて頂ければと思っております。

人間はどこまで動物か

『人間はどこまで動物か』という本があります。これはアドルフ・ポルトマンという生物学者による百年ほど前の著作で、人間特有の生まれと育ちに着眼した非常に面白い学説を展開する本です。ポルトマンは、元々巻貝の形を調べたり、鳥類がどういうふうに子育てをするか調べたりと、いわゆる形態学を中心に研究していて、その延長で人間と他の哺乳類との比較を行いました。彼の一番有名な言葉に「人間は生理的早産である」というものがあります。人は他の動物に比べて妊娠期間が長い割に生まれてきた子どもは非常に未熟である。例えば子馬の誕生とかをテレビで見ますと、生まれてしばらく経ったら一生懸命手足を伸ばして立って歩き始めて、親の近くへ行って乳を飲んだり、或いは群れの中に入って、数日もすれば一丁前とはいかなくても徐々に群れに馴染んでいくわけです。妊娠期間が長いと動きも鈍くなりますから、野生環境の中では他の動物に襲われ易くなり生命の危険が増します。人間は妊娠期間が長い上に生まれてからも子馬や他の哺乳類の多くのようにすぐ行動出来るわけではありませんから、野生の理屈に合いません。人間の赤ん坊はひっくり返ったままで首も据わらないで、簡単に言うと自分だけでは自分の生を維持出来ないという状態で生まれ、その状態が長く続くわけです。

ポルトマンは、人の子どもが一歳になった頃に立って歩けるようになるということから、本来もう一年間母体の中で育つべきところが、未熟な状態で生まれ出て育つというふうに考えました。生理的に育つのではなくて、外界で社会の中で育つというのが人間の特性だ。そのことによって人間は非常にゆっくりゆっくり人の中で育つ、そしてそれは人間の生存の戦略だというのです。多くの哺乳類は考える余地なく、群れの中に吸い込まれて、本能に従って運命

を生きていくのに対して、人間は人との関わり中でゆっくり時間をかけながら自分を創っていくわけです。「めだかの学校」という歌がありますけれども、どっちが先生でどっちが生徒で、誰が親か何かがもうあっという間に分からなくなるけれど、今日の先生方の話じゃないですが、生まれてどれだけ学校に通わないと人間が人間らしくなれないのだろうかというぐらい長い時間をかけて人は育っていくということです。逆の言い方をすると、人間は本能に支配されず、何にでもなれるという可能性を持っているということです。

例えば物語の主人公は殆どが少年少女です。桃太郎だったり、浦島太郎だったり、様々な物語が世界中にありますけれども、何故主人公が子どもかというと、色々なものに成長して変わっていく可能性を持っているからです。主人公が冒険をしながらたくましく成長していくということが、人間のある種の希望を見出すことにつながるわけです。ただ、このゆっくり育つ、豊かに育つということは良さの反面、私と社会の「意味の網目」を常に必要とします。つまり、人は、「この世界の中で自分は何者か」ということを常に問い続けることになるわけで、それは不安も同時に抱える存在であるということです。このことをまず念頭において次の話に移りたいと思います。

幼稚園生活のスタート

人間が家庭以外の集団に初めて出会うのが幼稚園という場です。多くの場合は、今は保育園に通うお子さんも多いですけれど、家庭的な環境の中で守られていた世界から一歩踏み出して、知らない大人や子どもがいる集団に初めて出会うスタートの学校です。基本的には三歳から幼稚園となっておりまして、多くの子どもにとって初めての社会生活が始まります。

この写真はちょうど四月八日、入園式の日は花祭になります。お釈迦様は生まれて七歩歩き出したそうですけれど、幼稚園の子どもたちはこの日が一歩目です。初めての幼稚園に来て「さあ始まる」というところですね。みんなニコ

ニコしながら誕生仏に甘茶をかけております。これはこうしなさいなんて話さなくても、大人や周りの子がしていると、子どもは面白がって真似して甘茶をかけたりお話を聞いたりしながら「へえ、そうなんだ」というふうに体験しながら自分ごとにして行きます。

こちら写真は、入園式の翌日の様子です。初めて幼稚園に来た時の子どもはどうするのかというと、これがなかなか面白いのです。お部屋に閉じ込めると結構しんどいものですから、「幼稚園はいっぱい遊べて楽しいところだよ」と伝えたくて、出来るだけ自由に過ごすようにしてあげたり、外で一緒に遊んだりしますけど、さっきまで親から離れる時に泣いていたり、いつの間にかお母さんがいなくなって不安がっていた子が、どこかで意を決して何か自分でやることを見つけ始めます。人間ってとっても前向きだと思うのが、左上の写真は急に砂を運び出したり、「これなら知っている」とブランコに一人で乗ってみたり、或いは滑り台を滑ってみたりしています。でもこれ一回滑るだけではなくて、二回目はちょっと手を緩めてさっきより早く滑ってみたり、この写真の子は帽子を先に滑らしています。そういうふうにしながら、何かしながら自分で前向きに何か見つけよう、何かやってみようという気持ちを大変持っています。小さなアスレチックの上のグラグラする橋の上を渡っている子もいます。「この姿は何だろう？」と私はいつも思うのですが、「これをしなさい」ではないのに、子どもたちは一生懸命に「何かまるで自分のすべきことを探して勤めている」ようにすら思えます。これは丁度端っこで、一人で何かやっている子が居たものですから、写真を撮りましたが、転がっている丸太を手に取ってよいしょよいしょと運んでいるところです。よく見ると並べるように置いています。さっきまで横になっていたのを今度は縦に積んで、結構重いのに一生懸命働いています。他の子は他の遊びをしていますから、まだ友達も居ませんけれど、この子はこの子なりに一生懸命納得するまでやって、最後よく見たら丸い輪切りの丸太を乗っけて何かここに一つの世界をこの子なりに作り上げたわけです。こうやって、身の回りの物事と触れて自分で働きかけながら、そしてそこに何か美意識を見出すかもしれないし、納得を見つけるかもしれ

ない。こういうことが日々多く繰り返されています。

こちらの写真はお部屋での遊びの様子です。これは入園してから少し経ってからの姿です。女の子がブロックを一個ずつ運んで繋げています。これなら出来ると思って始めたのだと思いますけれど、一個ずつまた取りに行っては繋げてということを繰り返しています。面白いと思ったのが、次の写真です。女の子が繋げたブロックの一番最初の端の方で、「良いものの見つけた」と思ったのか、そこに自分の持っていたミニカーを走らせて遊んでいる男の子がいます。女の子と一緒に遊んでいるわけではないけれども、その子が繋げたのが素敵だなと思って自分でそれを活用していて、ニヤニヤニヤしながらお互いを受け入れながら遊んでいる姿を見ることができます。しばらくするとさらに面白いことが起きました。また別な子が来て何をするかなと思ったらブロックを跨いで仁王立ちするかのようにジーっとしています。どうもこの子はこれまでの遊びを見て、僕はトンネルになってやろうということを思いついてやってみたのでしょう。こうしたじんわりとした関係を作りながら子どもは人と人が友達になるなんてことをこの場所で経験しています。

この写真はもうちょっと経ってからの三歳の子たちの遊びの様子です。この一か月ちょっとの間にこんなに子ども同士が関わって遊べるようになっていきます。ここは見えないのですが、実はこういう中に全て保育者が影に密やかに関わっています。遊ぶ環境をつくったり、最初は外にいてぼーっとしている子に「一緒に遊ぼうと」言って、何か遊び始めて泥団子を作ったりしていたら、「面白そう」と他の子も来て緒に遊びに加わって、「これがいるあれがいる」なんて子どもが動き出したら、そこでスーッと保育者は身を引いて、「ここからは、この子たちが自分たちで出来そうだな」と判断して、そういうふうに配慮しながら関わっているわけです。

みなとくんと蟬

幼児期の子どもは、身の回りで起こることにとても敏感です。大人のように背が高くないですから、地面に近くて、いつも砂や水や葉っぱや、そうした足元の自然と親和性が高いのが特徴です。虫を見つけたらその動きが面白くてしょうがないらしく、手のひらに乗せた生き物を宝物のように持って目を輝かせています。これは不思議な感じがしますが、世間では自分たち子どもは小さい人間なのに、自分たちより小さな生き物を手の中に持ってほくそ笑むという面白い構図になっています。ここでは虫にまつわる子どものエピソードを一つお話ししたいと思います。

みなと君というどちらかというとおとなしい子どもが居まして、この子は四歳になったところですけれど、小さな虫の図鑑を首からさげて幼稚園に来た日がありました。珍しいなと、この子がそれまで虫に興味があるようには思えなかったので幼稚園の門前で少し話を交わしていました。すると丁度その時、入り口付近の桜の木にセミが止まって、みなと君が図鑑のセミのページを一生懸命広げて見せます。私もこれは何とかしてセミを取ってやろうと思って、無理してフェンスによじ登って、ばっと手を出したらうまいことセミが捕れまして、すぐに手渡そうとしました。ところがみなとくんは怖がってなかなか摑めなくて、セミの図鑑を見るのは嬉しそうにしていたのに、まだ触ったことはないらしく、そこで持ち方のコツを伝えてなんとか渡しました。緊張しながら一生懸命手に持って恐々見ているので、「教室に持って行ってみんなに見せたら?」と言うと、園舎の方に駆けていきました。その後、次々親子が登園し、そろそろ門を閉めようかという頃に、またみなと君が降りてきました。「あれ、どうしたの?」と聞いたら、「木が欲しい」と。「砂場の奥の方にあるかも」と教えました。最初、何の話か分からなかったのですが、少しその映像があります。

（映像）「見つけてきた」と、小枝を見せてくれているところです。

これ何かというと、「セミのためにとまる木がいる」と考えたらしいのです。だったらもうちょっと太い枝のほうが

良かったかなと思いましたけれど、でも彼なりに蟬のために何かをしたいと考えたのですね。

こちらは翌日の朝の映像です。次の日もまた図鑑を持ってきて、今度はものすごく詳しく私に蟬の話をします。「セミの目はこうなっててね…、オスとメスの違いはね…」。昨日までセミを摑むことすら出来なかったのに、もうセミのことは何でも知っているぐらいの感じで、彼は一生懸命話します。

（映像）

すごく嬉しそうにしています。弱ってきたから逃がそうなんてことまではまだ思わないようでしたが、何か一つの小さな出来事が子どもに大きく影響します。同じ一日でも、大人にとっての一日と子どもにとっての一日では、その重みは違うように思います。毎日そういう輝くような日々を、小さい子どもたちは過ごしているのです。

この後、ちょっとショックなことがありました。みなとくんが暫くすると大変落ち込んでいると言うことを聞きまして、どうしたのだろうと思ってお母さんに聞いたところ、「先生、虫が死んで、そしたら急にママも死んじゃうのっていうふうに言うようになって、毎日夜になるとママは死ぬのっていう話をするようになったんです」。これは、私の経験的にも四歳ぐらいの子どもが「死」について考えることを始める時期になります。「おばあちゃんも死んじゃうの」とか、いろいろな事を言って夜泣きするようになってしまったそうです。これでどうしたものかなと思って、「死とは何か」なんてことを安易にこちらが説明して本人が納得するわけはないわけです。ではどうすれば本人がその死というものが分かるかなと思って、何かいい方法はないか、例えば小さい子だから絵本とかを読んで、その中でそういうお話があったらいいのじゃないかということで、そういうものを先生達と探しましたが、それでもピタッとくるものは中々見つからない。そのことを保護者たちにも少し話したら、あちこちから「みなとくん大丈夫ですか？」という話が聞こえるようになりました。暫くみんなに知恵を借りましたが、中々解決しないでこれは難しい問題だと思っていたら、ある日、お母さんがニコニコして来て「もう大丈夫です。」と言って、みなとくんもニコニコしています。

大分落ち込みがなくなって忘れてしまったのかなと思ったら、びっくりしたのですが、「僕ね、ママもおばあちゃんも死なないようにお祈りしたの。お祈りすることにしたから大丈夫。」と言うではないですか。もうびっくりしました。子どもが「死」というものを「祈る」ということで何とか恐怖から乗り越えようとしている。こんな小さい子に「祈る」というものがちゃんとあるのだと、私はとても驚きました。

仏教保育の基本理念

仏教には「仏・法・僧」の三つの宝があると言われています。仏教保育でこれを子ども向けにわかりやすくしたのが「明るく・正しく・仲良く」という言い方になります。「明るく」は仏様のことで、仏・法・僧の「仏」です。仏様すなわちお釈迦様は前向きで、自分が王子だった身分も捨てて、人々のために未来のために何かをしたいと前向きに生きられました。子どもたちも先ほど見たように前向きに生きています。前向きだということは「明るい」ということです。それから仏法僧の「法」。これは世の中の仕組みだったり、教えだったり、ほかの宗教と違って仏教には絶対神がないですから、こちらも正しいかもしれないけれどもこちらも正しいと、むしろそういう関係の中で世の中動いている。ですから、子ども同士の喧嘩も何も、誰かだけが正しいものではなくて、それぞれの立場でそれぞれの思いがあるのだよということを大事にしています。それから仏法僧の「僧」。お坊さんの僧は「サンガ」＝「仲良く」です。これは理想のためにみんなで力を合わせましょうということです。幼稚園の先生もお父さんお母さんも、そこに来る配達の人も、水槽掃除に来る方も、バスの運転手さんも、園長も用務員も誰も関係なく、幼稚園という場では子どものためにみんなが力を合わす関係であろうということを常々言っております。

保育というのは、昔は何かを教えるところだというふうに思われていましたが、科学技術の発達に伴い、子どもは自ら学ぶ存在であるということがお腹の中の映像からも今はもう克明に分かるようになりました。彼らは生まれなが

らにして、もっと言えばお腹にいる時から、自ら学ぶ存在だということです。ですから「保育」というのは、子どもたちと共に園生活を営んで、子どもが身の回りの環境と出会い葛藤して、そこで納得することを一生懸命見つけようとするのを寄り添って援助する。それが今の「こども主体の保育」になっております。そのことは実は現在の教育全般における「探究型の教育」の原型です。答えをただ渡すのではなく、疑問を発見し、どうやって解決していくか、それぞれが考えていく教育です。近年アメリカで『幼稚園の発明』という本が出たのですけれども、この中で近代の発明の中で何が一番優れているか、コンピューターか、何か色々な物がある中で、ある学者が「一番の発明は幼稚園だ」というふうな発言をしています。人間が人間を育てて、そこで豊かに体験することを保障する、幼稚園ほど人類にとって大きな発明はないという指摘です。

保育は、「保護」と「教育」が合わさったものです。私は、保育という営み自体が生命尊重の営みなのではないかというふうに思いながら、仏教保育というものに関わらせていただいております。ご静聴ありがとうございました。

（さめじま　りょういち・鶴見大学短期大学部附属三松幼稚園園長）